

**TNC**  
**通信**

2021  
12月号

## 魯迅生誕140周年記念の 中日オンライン交流会行う

＊新潟総領事館主催・県協会後援＊

10月30日、新潟及び中国と仙台をzoomオンラインで結び、記念交流会が開かれました。初めに孫大剛総領事(写真㊤)、村井宮城県知事、孔鉉佑駐日大使のあいさつの後、周令飛・魯迅文化基金会会長(写真㊦)や王衆一・人民中国雑誌社編集長、山口昌弘・東北大副学長、車田敦・仙台



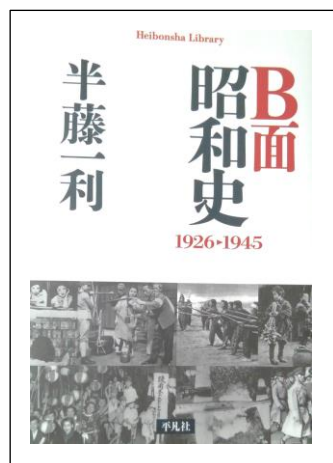
魯迅研究会理事長が講演を行い、また一般参加者から寄せられていた質問に答える企画も行われました。

### 【丑年アラカルト】

「孺子(じゅし)の牛と為る」丑年の最後なので、少し長いが魯迅で締めます。有名な「横眉冷對千夫指 俯首甘為孺子牛」の部分。意味は子息・海嬰の馬になる、であるが、子は愛する人民であり、自己犠牲を惜しまなかった、とする毛沢東等の解釈がある。共に生きた内山完造は「先生は“私は一頭の牛によく似ている。食べるものは草だが、絞り出すものは牛乳と血だ”。先生は八面攻撃の中で、すでに不治の病であり、民族の将来を見れば茫々たる砂漠の中で無形の敵との戦線に立っている」。外に向かつてはこの孺子の牛は戦闘者であるところから。 『魯迅日記・自嘲』

### 「2021 全日本中国語スピーチコンテスト」東北大会を開催

恒例の東北大会が10月31日、青葉区・青少年文化センターで行われ、29名が挑戦しました。朗読の部では高校生・大和町の田名綱さん、大学生・大河原町の高橋さん、一般の部・大崎市の小松さん。スピーチの部では山形市の松木さんが選ばれました。



『B面昭和史 1926-1945』(半藤一利著 平凡社ライブラリー 1100円)

本年1月に没した戦後史で著名な著者の昭和史シリーズの一冊。ほとんどが満州帝国、日中戦争に関わる内容なので紹介します。B面とは政治的事実ではなく、国内における庶民やマスコミの姿・言動を通して戦争の20年を見つめる事。事実をありのままに認識していく事が、平和な未来を創り、二度と過ちを繰り返さない事につなげたい、との著者の思いが伝わる。とにかく読んで面白い面も多い本。お薦めです！

### 『中国少数民族民話』「揺(ヤオ)族 イネとヒエの諍(いさかい)」

整然と植えられている田園のなかで、自然に生え育ってきたヒエ草が、隣のイネ苗にあてつけて言いました。「オレは背も高いし、体も丈夫だから、この田園はオレの天下だな!」。イネ苗は、君子の風格をもって応えました。「確かにキミは背も高いし、体も丈夫だ。でも所詮、ヒエ草じゃあないか。やっぱりこの田園は僕らのものだ-」

これを聞くと、ヒエ草は血相を変えて怒り、「やせっぽちのカマキリ野郎! ここで生まれ、ここで育っているオレ様に楯突くというのか?」。しかしイネ苗は、少しも弱みを見せません。道理に基づいて反論します。「黙りなさい! 天地が南北に分かれ、万物が本物と偽物に分かれることがあっても、白昼のもと、キミはここに長くは住めないのだよ」。ヒエ草は、ただ一言、「いいさ、オレたちはただ見ているだけにするよ。この田んぼがいったい、誰のものかを!」

一日、一日が過ぎていき、ヒエ草大きく育っていきましたが、イネ苗よりもまばらです。しかし肘を張り、前後左右に大きく広げて、周りのイネ苗を威圧します。そして得意になって、わめきちらします。「オレは生まれつき、他のものよりもすぐれているんだ。誰がオレのようにできるというんだ!」

ある日、どこまでも晴れた空の下、大勢の農民が田んぼにやってきました。そして、じりじりと照りつける太陽のもと、見開いたおおきな眼でヒエ草を見つけると、抜き取っては、あぜに投げました。ヒエ草は強い陽ざしにさらされて、すぐに萎れ、枯れてしまいました。秋、イネ苗は、金色の花穂をほころばせて、思いっきり喜びの声をあげました。「ヒエ草のやつはいなくなった—これで田んぼは平和になるなあ!」。「ダメ、ダメ—」それを耳ざとく聞きつけた農民は、イネ苗をたしなめて言いました。「ヒエ草を採りつくしたって? そんなことはない—また来年、生えてくるよ。だからいつも採らなくちゃ!」

※揺族 主な居住地は湖南、雲南、広西などの山岳地帯。農業を主としている。人々は織物、染色、刺繍に卓越し、民族衣装や踊りは独特である。人口は約280万人。